

事例項目	06 ケース会議 01 障害の特性理解・実態把握 05 学校体制づくりのサポート
概要	ケース会議から具体的教育支援へ向けての相談
事例提供校	高校： 西部地区 全日制 特支： 掛川特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	<p>【肢体不自由車椅子生徒の教育支援について】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 より良い保護者対応、介助員研修をどう進めることがよいかですか。 2 介助員の訴えや要望にどう応えたらよいですか。 3 本人の困り事と各教科担任の困り事、介助員の困り事や訴え等を、どう整理してよいか分かりません。 4 「合理的配慮」が何なのか分からなくなっています。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）

- ・本人を取り巻く介助員や教職員の困り感と訴えを一覧にして整理しました。
- ・機能面についての合理的配慮を明確にし、共通理解することや合理的配慮と称していることが、実際のところ不必要なことだったり、過剰なサービスだったりしていることを指摘しました。
- ・車椅子に乗っていても、同じ高校生の生徒指導と同じことを求めることを助言しました。
- ・介助員の役割や学校として求めていることを明確に提示することを助言しました。
- ・保護者が我が子を育ててきた背景と歴史を十分に尊重した上で、相互に相談したり協議したり明確な説明ができたりする関係であることを助言しました。

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	<ul style="list-style-type: none"> ・言い出せなかったことが、「これで良かったんだと」確信できました。 ・本人に遠慮していたことが間違っていたことだと分かりました。 ・介助員への研修をどのような目的でやればよいか分かりました。 ・配慮すべき点とそうでない部分が整理できました。 ・介助員へも本人へも、どのような対応や関わり方をすることが望ましいのかを共通理解しました。 ・介助員研修実施計画に、また研修支援として協力してほしいです。
	特別支援学校 担当者のコメント

- ・介助員からのアンケート、教科担当からのアンケートをとり関係教職員でケース会議を行ったことは良かったが、そのケース会議では情報共有だけに留まり、具体的にどんな作業を誰がどのように進めていくのかという明確で具体性を持つところまでにはいたりませんでした。

まとめ
<p>本事例は、生徒への教育支援だけでなく、「正しい合理的配慮の考え方」「配慮と称した過剰介入」「優しさという人権侵害」「介助者とセルフコントロール」など、背景に多岐にわたった問題を抱えていました。関わる全ての人が良い人権感覚と正しい特別支援教育の考え方が必要だと感じました。</p>

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。